

縁あつて、俳諧にあらわれたる陶磁器を調査することがあつた。もちろん完璧な調査をすませたわけではない。いや調査といふことばが堅くしい。俳書をひらひらと繰りながら、陶磁器関係の語はないかと目を通して見たというのが近い。

まず、談林からいこう。

こは何としがらき茶碗破た中 任口

いとまはかたい壺のいしぶみ

「誹枕」にある。ついでを以ていえば

信楽にはよくお目にかかる。

あらかねの土うかつ穴蔵

久堅の天目花生瀬戸物屋

目利はいかか見る庭の梅

「談林十百韻(第四)」にある。ともに

全く談林らしい口つぎだ。洒落で、奔放で、抑えるところは抑えて。

だが談林にも別な面もある。

薩摩焼瓶に咲けり大すみれ

錦手や伊万里の山の薄紅葉

この宗因の句は陶磁器を直接扱つたものではないが、やきもの語や産地をあ

しらつて、まことにしやれた仕立てよ

うだ。

取かへす玉にもがもな萩茶わん

「追善に」という前書きがあつて、一

鉄の作。

次に、蕉風に移ろう。

黒絹の小袖は襟のあからみて

呉州の茶碗を売に出さるる

「元禄六年」作の歌仙にある。そうい

えば、何だか「炭俵」の味わいがある

やきものと談林・

蕉風・天明調

岡本彦一

ではないか。わたくしは、蕉風俳諧に

この付合を見出すことができたのをう

れしく思う。しつとりと人生とからみ

あつてゐるからだ。

しかし、蕉風にも次のような付合も

ある。

をさめかねたる儒者の小宅

六経の花を古瀬戸に秘蔵せん

邪なしとおもへ日ながく

この歌仙、成立年次に諸説があつて、

さだかでない。ともかく、「春の日」

あたりの作風か。この三句儒教関係の

語でつづけている。その中に古瀬戸が

出た。

最後に、天明調。

小暗きと明きと燭の二所

手こねの香爐打守りつつ

「此ほとり一夜四陰」四歌仙其二にあ

る。

談林の生活は、作者の生地そのまま

だ。蕉風の、しかも「炭俵」あたりの

生活は、作者の目が、深く人の世を捉

えている。その身になり、かつ、それ

をつきはなしている。

この「小暗き」の付合、うまい、い

い情景だが、何だか人生が浮いてはい

ないか。趣味になつていないか。文人

人趣味が前面に出てきたのだ。

焼物に宵の席書添てやり

利休好みの利休迷惑

「ふたりづれ」にある。この付合、い

ささか解説がいてと思うが、こういう

流し方が天明調にはあつた。